

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

## リトアニア語の否定、形容詞と連体修飾節

### Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification in Lithuanian

櫻井 映子

Eiko Sakurai

東京外国語大学非常勤講師

Part-time Lecturer, Tokyo University of Foreign Studies

**要旨:** 本稿の目的は、特集「否定、形容詞と連体修飾複文」(『語学研究所論集』第23号、東京外国語大学)における33個のアンケート項目に対するリトアニア語のデータを与えることである。

**Abstract:** This report aims to provide the Lithuanian data which answers the thirty three survey questions for the special volume of the *Journal of the Institute of Language Research* 23, which focuses on the cross linguistic study of 'negation, adjectives, and compound sentences of adnominal modification'.

**キーワード:** リトアニア語, 否定, 形容詞, 連体修飾, 複文

**Keywords:** Lithuanian, negation, adjective, adnominal modification, compound sentence

リトアニア語は、バルト海東岸に位置するリトアニア共和国の公用語で、話者の数は約300万人である。姉妹語のラトヴィア語とともにインド・ヨーロッパ語族のバルト語派に属している。古い屈折組織や自由アクセントをよく保持しており、インド・ヨーロッパ語族の諸現代語中でも最も古風な言語の一つに数えられている。名詞類は7つの格(主格, 属格, 与格, 対格, 具格, 位格, 呼格)と2つの性(男性, 女性)を区別し、動詞は3つの人称(1・2・3人称)と2つの数(単数, 複数)を区別する。語順はかなり自由であるが、優勢な語順はSVOで、典型的な他動詞構文では、主語は主格、直接目的語は対格を取る。間接目的語は与格を取り、直接目的語より前に置かれる傾向がある。

また、リトアニア語は、分詞の種類と形態が非常に豊富な言語である。分詞は、形態によって以下のように大別される。

(a) 分詞(形容詞的分詞): 性・数・格により変化する。能動態と受動態がある。現在/ (一般) 過去/ 習慣過去/ 未来能動分詞, 現在/ 過去/ 未来受動分詞, 必要分詞がこれに属する。

(b) 半分詞: 性・数により変化する(主格形のみ)。能動態のみで受動態をもたない。

(c) 副分詞(副詞的分詞): 不変化である。能動態のみで受動態をもたない。現在/ 過去/ 習慣過去/ 未来副分詞がこれに属する。

形容詞的な分詞は、基本的に、定語的、半述語的(状況語的・補語的)、および、述語的機能をもつ。半分詞と副分詞は、半述語的機能のみをもつ。

関係節は、関係代名詞を用いて形成される(関係代名詞型)。関係代名詞は性・数・格により変化する、被修飾名詞が関係節の中で担う文法的役割(主語、目的語等)を示す。関係代名詞は被修飾名詞の直後(関係節の最初)に置かれる。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

否定は、否定標識である否定詞 *ne* によって表される。主な否定詞には、*ne* “ない、いいえ”、*nebe* “もはや～ない”、*nė* および *nei* “～も (ない)” の4つがある。*ne* “ない、(質問に答えて) いいえ” と *nebe* “もはや～ない” は否定の接頭辞としての機能も兼ねており、形容詞、副詞、名詞に付して否定の意味を表すのみならず、動詞に付して否定文を形成するのに用いられる (*ne-*, *nebe-*; 動詞と一続きに綴られる)。*nė* および *nei* は、ふつう否定標識である *ne* (あるいは *nebe*) をともなって、否定の強意を表す。なお、英語などとは異なり、リトアニア語では、*niekas* 「誰も・何も (～ない)」、*niekad* 「かつて・一度も (～ない)」、*niekaip* 「決して (～ない)」、*niekur* 「どこにも (～ない)」といった否定の代名詞や副詞も、一般的に *ne* (*ne-*) をともない、単独では用いられない。

なお、バルト・スラヴ諸語に共通する「否定の属格 (生格)」、すなわち、否定の他動詞文の直接目的語、および、否定の存在文 (すなわち不在を表す文) の主語は属格をとる現象が、リトアニア語においても見られる。

それでは、以下にリトアニア語の言語データを示す。文脈や発話状況により多様な表現が可能であるが、ここでは最も基本的な表現のみを挙げる。リトアニア語への翻訳にあたり、3名のリトアニア人にインフォーマントとして協力を依頼した<sup>1</sup>。

#### 【名詞述語文／コピュラ文の否定】

リトアニア語の動詞 *būti* 「ある、いる、～である」は、英語の *be* 動詞に相当し、存在動詞としてもコピュラ動詞としても機能する。

まず、日本語の「これは～である」という意味の文に相当するリトアニア語の表現 *Čia [yra] ~ (būti* の3人称現在形 *yra* は省略可能)、直訳すると「ここに～がある」という意味である。これは本来的には存在文であり、コピュラ文ではない。*būti* の否定形 *nebūti* の人称変化形 (3人称現在形 *nėra*) を用いると *Čia nėra ~* 「ここには～がない」という不在の意味になる。よって、「これは～ではない」という意味を表す否定文を作るには、*būti* の後に否定詞 *ne* を添える。

(1) これは私の本ではない (直訳：ここにあるのは私の本ではない)。

|            |              |           |             |                             |
|------------|--------------|-----------|-------------|-----------------------------|
| <i>Čia</i> | <i>[yra]</i> | <i>ne</i> | <i>mano</i> | <i>knyga</i> . <sup>2</sup> |
| ここに        | ある.PRS.3     | NEG       | 私の          | 本.F.SG.NOM                  |

一方、「それは～ではない」という表現は、定代名詞 *tai* 「それ」(中性形) を主語とするコピュラ文の否定である。*būti* の否定 *nebūti* の3人称現在形 *nėra* は、否定詞 *ne* に置換可能である。

(1)' それは私の本ではない。

|               |             |             |                |
|---------------|-------------|-------------|----------------|
| a. <i>Tai</i> | <i>nėra</i> | <i>mano</i> | <i>knyga</i> . |
| それは           | ～でない.PRS.3  | 私の          | 本.F.SG.NOM     |

<sup>1</sup> 調査に協力してくださった Ramutė Bingelienė 氏 (1966年 Klaipėda 生まれ、ヴィリニウス大学リトアニア語教師)、Jurgita Ignocienė 氏 (1983年 Rokiškis 生まれ、同大学日本語教師) ならびに Mindaugas Ignocias 氏 (1985年 Vilnius 生まれ、同大学日本語教師) に心よりお礼申し上げます。なお、インフォーマントによれば、本アンケートで扱う内容に関する限り、方言差や世代差はとくに感じられないとのことである。

<sup>2</sup> 本稿で用いる略号は以下の通り：ACC accusative (対格); ADV adverb(ial) (副詞(的)); DAT dative (与格); F feminine (女性); FUT future (未来); GEN genitive (属格); IMP imperative (命令法); INF infinitive (不定詞); INS instrumental (具格); LOC locative (位格); M masculine (男性); N neuter (中性); NEG negative (否定); NOM nominative (主格); P participle (分詞); PASS passive (受動態); PL plural (複数); PRS present (現在); SG singular (単数)。なお、括弧 [ ] は省略可能、括弧 { } は置換可能であることを示す。

- b. Tai ne mano knyga.  
 それは NEG 私の 本.F.SG.NOM

【存在文の否定】

存在動詞として機能する būti 「ある, いる」の否定 nebūti 「ない, いない」を述語とする存在文の否定(不在を表す文)の場合, 主語は主格ではなく属格(いわゆる「否定の属格」となる。基本的に, 可算名詞は複数属格, 不可算名詞は単数属格で表されるが, 「一つもない」というニュアンスをもつ場合は, 可算名詞でも単数となる。

- (2) この部屋には椅子がない。

Šiame kambaryje nėra {kėdės / kėdžių}.  
 この 部屋に.M.SG.LOC ない.PRS.3 椅子が.F.SG/PL.GEN

【全部否定・モノ】

全部否定は, nè/nei vienas 「一人も・一つも(～ない)」, もしくは, 副詞 visai 「まったく」と, 否定詞 ne をともなう否定表現によって表される。なお, nè/nei vienas の vienas は数詞の「1」であり, 形容詞や代名詞などと同様に, 関係する名詞の性・数・格に一致する。

- (3) この部屋には一つも椅子がない。

- a. Šiame kambaryje nėra {nė / nei} vienos kėdės.  
 この 部屋に.M.SG.LOC ない.PRS.3 一人も・一つも.F.SG.GEN 椅子が.F.SG.GEN
- b. Šiame kambaryje visai nėra kėdžių.  
 この 部屋に.M.SG.LOC まったく ない.PRS.3 椅子が.F.PL.GEN

【全部否定・ヒト】

否定代名詞 niekas は「誰も・何も(～ない)」はヒトにもモノにも用いられる。

- (4) その部屋には誰もいない。

- a. Tame kambaryje nėra nė vieno žmogaus.  
 その 部屋に.M.SG.LOC ない.PRS.3 一人も・一つも.M.SG.GEN 人が.M.SG.GEN
- b. Tame kambaryje nieko nėra.  
 その 部屋に.M.SG.LOC 誰も・何も.GEN いない.PRS.3

【所在文の否定】

所在文の否定については, 単純に「～は～にない」という意味を表す場合には, 存在動詞 būti の否定 nebūti 「ない, いない」を述語とし, 主語は属格(否定の属格)になる。

- (5) その本はこの部屋にない。

- a. Tos knygos nėra šiame kambaryje.  
 その 本は.F.SG.GEN ない.PRS.3 この 部屋に.M.SG.LOC

一方, 「～は～にはない」, すなわち, この部屋にはないが, 他の場所にあることを意味する場合は, 存在動詞として機能する būti は肯定形のまま, 否定詞 ne は分離して「この部屋に」のような所在の場所の表現の前に置かれる。存在自体を否定するわけではないので, 主語は主格のまま「否定の属格」とはならない。

- b. Ta knyga yra ne šiame kambaryje.  
 その本は.FSG.NOM ある.PRS.3 NEG この部屋に.M.SG.LOC  
 その本はこの部屋にはない（他の場所にある）。

### 【形容詞文の否定】

形容詞文の否定の場合、コピュラ動詞として機能する *būti* 「～である」の否定形 *nebūti* 「～でない」を用いる文(6a)、および、形容詞に否定詞 *ne-*を付加して形成される否定の意味の形容詞を用いた文(6b)のいずれも可能である。インフォーマントによれば、両者の違いはあまり感じられないが、厳密に言えば、(6a)は文全体の否定、(6b)は特性の否定である。すなわち、(6a)は「予想は外れていた。実際に見てみると、この犬は大きくない」などといったコンテキストが可能であるが、(6b)はそうではない。一方、(6b)の *ne-didelis* 「大きくない」のような、*ne-*を付加して形成される否定の形容詞は、意味的には「大きい」に対して「小さい」のように、もとの形容詞の反意語に相当する。従って、他の形容詞との組み合わせによる、「この犬は賢くおだやかで大きくない。家で飼うのに適している」といったコンテキストが想定できる。

(6) この犬は大きくない。

- a. Šis šuo nėra didelis.  
 この犬は.M.SG.NOM ～でない.PRS.3 大きい.M.SG.NOM
- b. Šis šuo [yra] ne-didelis.  
 この犬は.M.SG.NOM ～である.PRS.3 NEG-大きい.M.SG.NOM

### 【形容詞文の部分否定】

形容詞文の部分否定は、英語などと同様に、副詞 *labai* 「とても」を形容詞に添え、*būti* 「～である」の否定形 *nebūti* 「～でない」を用いた文(7a)、および、副詞 *labai* 「とても」に否定詞 *ne* を付加して形成される部分否定を表す副詞 *nelabai* 「あまり～ない」を用いた文(7b)、いずれも可能である。

(7) この犬はあまり大きくない。

- Šis šuo nėra labai didelis.  
 この犬は.M.SG.NOM ～でない.PRS.3 とても 大きい.M.SG.NOM
- Šis šuo [yra] ne-labai didelis.  
 この犬は.M.SG.NOM ～である.PRS.3 NEG-とても (=あまり～ない) 大きい.M.SG.NOM

### 【比較級】

リトアニア語には、形容詞と副詞に比較級の形式がある。比較基準（対象）「～よりも」は、*negu*+主格、もしくは、*už*+対格によって表される。

(8) この犬はあの犬より大きい。

- a. Šis šuo [yra] didesnis negu tas šuo.  
 この犬は.M.SG.NOM ～である.PRS.3 より大きい.M.SG.NOM ～よりも あの犬.M.SG.NOM
- b. Šis šuo [yra] didesnis už tą šunį.  
 この犬は.M.SG.NOM ～である.PRS.3 より大きい.M.SG.NOM ～よりも あの犬.M.SG.ACC

### 【最上級】

リトアニア語には、形容詞と副詞に最上級の形式がある。形容詞の最上級には、しばしば、強意の代名詞 *pats/pati* 「自身、まさに」（男性／女性）が添えられる。

(9) この犬がその犬たちの中で一番大きい.

- a. Šis šuo [yra] (pats) didžiausias tarp tų šunų.  
 この 犬は.M.SG.NOM ~である.PRS.3 まさに 最も大きい.M.SG.NOM ~の間で その 犬.M.PL.GEN
- b. Šis šuo [yra] (pats) didžiausias iš tų šunų.  
 この 犬は.M.SG.NOM ~である.PRS.3 まさに 最も大きい.M.SG.NOM ~の中から その 犬.M.PL.GEN

【自動詞文の否定】

自動詞文のうち, 存在文の否定である不在文の場合以外は, 「否定の属格」は見られない.

(10) 今日はあの人には来ない.

Šiandien tas žmogus ne-ateis.  
 今日 あの人.M.SG.NOM NEG-来る.FUT.3

【他動詞文の否定】

他動詞文の否定の場合は, 直接目的語が対格ではなく属格となる「否定の属格」が義務的に見られる.

(11) あの人はその本を持って行かなかった.

Tas žmogus ne-pasiėmė tos knygos.  
 あの人.M.SG.NOM NEG-持って行った.PAST.3 その 本.F.SG.GEN

【数量の全部否定】

数量の全部否定の場合, 定代名詞 *visas* 「全ての」と否定詞 *ne* による「全ての～が～なかった」という表現が可能である(12a). ただし, インフォーマントによれば, 否定代名詞 *niekas* 「誰も・何も(～ない)」や *nė vienas* 「一人も・一つも(～ない)」を用いた全部否定の表現の方がより自然である(12b, c).

(12) 全ての学生が参加しなかった/学生は全員参加しなかった.

- a. Visi studentai ne-dalyvavo.  
 すべての 学生たち.M.PL.NOM NEG-参加した.PAST.3
- b. Niekas iš studentų ne-dalyvavo.  
 誰も・何も.NOM ~の中から 学生たち.M.PL.GEN NEG-参加した.PAST.3
- c. Nė vienas studentas ne-dalyvavo.  
 一人も・一つも.M.SG.NOM 学生.M.SG.NOM NEG-参加した.PAST.3

【数量の部分否定】

(13) 全ての学生が参加したわけではない.

Ne visi studentai dalyvavo.  
 NEG すべての 学生たち.M.PL.NOM 参加した.PAST.3

【文の否定】

(14) (私は買わなかった. しかし, 決して) 値段が高いというわけではない.

(Aš nepirkau. Bet jokiū būdu) ne dėl to, kad kaina [yra] didelė.  
 私は買わなかった しかし 決して NEG ~ために ~こと 値段.F.SG.NOM ~である.PRS.3 大きい.F.SG.NOM

【禁止】

禁止は, 命令形に否定接頭辞の *ne-* を添えて表すのが一般的である.

(15) 走るな！

Ne-bėk!  
NEG-走れ.IMP.2SG

(16) 大きな声を出すな！

Ne-kalbėk                      garsiai!  
NEG-話せ.IMP.2SG              大声で・大きな声を出して

### 【推量の否定】

推量「～だろう」は、モダリティ的な意味をもつ接続法現在形の *turėti* 「もつ」（「おそらく～だろう」）と動詞の不定形の組み合わせによって表される。否定の場合は、*turėti* に否定の接頭辞 *ne-* を付ける。

(17) 明日は雨は降らないだろう。

- a. *Rytoj ne-turėtų*                      *lyti.*  
明日 NEG-おそらく～だろう.SBJV.PRS.3      雨降る.INF
- b. *Rytoj ne-turėtų*                      *būti*      *lietaus.*  
明日 NEG-おそらく～だろう.SBJV.PRS.3      ある.INF      雨.M.SG.GEN

### 【目的節の否定】

リトアニア語の目的節は接続詞 *kad* によって導かれる。目的節内では、肯定・否定の別にかかわらず、接続法が用いられる。

(18) あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。

*Kalbėk*      *tyliai,*                      *kad*                      *tas žmogus*                      *ne-išgirstų.*  
話せ.IMP.2SG      小さな声で                      ～こと（ように）                      あの 人.M.SG.NOM      NEG-聞きつける.SBJV.PRS.3

### 【否定のスキープの調節】

例文(19)の日本語の文「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」をリトアニア語に訳すと、「私がそう言ったのは、あなたを怒らせたかったためではない」という表現になる。例文(19)のような場合、日本語とは異なり、リトアニア語では動詞「言った」を否定形にして「言わなかった（言ったんじゃない）」と訳すことはできない。理由を表す従属節 *dėl to, kad* 「～ために、～ので」の前に否定詞 *ne* を添える。

(19) 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。

*Aš*                      *taip*      *sakiau*                      *ne*      *dėl to,*  
私は.1SG.NOM      そのように 言った.PAST.1SG                      NEG      そのために

*kad*                      *norėjau*                      *jus*                      *įžeisti.*  
～こと                      ～したかった.PAST.1SG                      あなたを.2PL.ACC                      怒らせる.INF

### 【内の関係の連体修飾節・目的語】

日本語の内の関係の連体修飾節に対応するのは、リトアニア語では、多くの場合、関係代名詞として機能する疑問詞 *kuris* 「どの」を用いた関係代名詞節である。分詞がこれに代わることもある。関係代名詞節の先行詞である被修飾語名詞には、定代名詞の *tas* 「その」が任意で添えられる(20a)。また、リトアニア語は、受動が書き言葉のみならず話し言葉においてもきわめて頻繁に用いられる言語であり、受動分詞による「私によって昨日買われた本はどこにある？」のような（日本語に直訳すれば不自然となる）表現も全く自然である。なお、リトアニア語の受動文の動作者は属格（1・2人称の場合は所有代名詞）

によって表される (20b). インフォーマントによれば、両者の違いは、(20a)は、「(私が) その本を買った」という行為がすでに遂行された (そしてすでにその本を持っている) ことに重点が置かれた表現であるのに対し、(20b)は、受動分詞による定語的表現であり、その本は (たとえば、もらったのではなく) 「(私が) 買った」ものである点に重点が置かれた表現であると言える。

(20) 私が昨日買ってきた本はどこ (にある) ?

- a. Kur yra (ta) knyga, kurią nusipirkau vakar?  
 どこにある.PRS.3 その本.F.SG.NOM どの.F.SG.ACC 買った.PAST.1SG 昨日
- b. Kur yra mano vakar nusipirkta knyga?  
 どこにある.PRS.3 私の(によって) 昨日 買った(買われた).PASS.PAST.PTCP.F.SG.NOM 本.F.SG.NOM

【内の関係の連体修飾節・主語】

内の関係の連体修飾節の先行詞がヒトを意味する主語の場合、名詞 žmogus 「人」を先行詞とする場合 (21a)と、これを省いて定代名詞 tas 「その」のみが先行詞となる場合(21b)がある。

(21) その本を持って来た人は誰 (か) ?

- a. Kas yra tas žmogus, kuris atnešė tą knygą?  
 誰.NOM ~である.PRS.3 その人.M.SG.NOM どの.M.SG.NOM 持って来た.PAST.3 その本を.F.SG.ACC
- b. Kas yra tas, kuris atnešė tą knygą?  
 誰.NOM ~である.PRS.3 その.M.SG.NOM どの.M.SG.NOM 持って来た.PAST.3 その本を.F.SG.ACC

【内の関係の連体修飾節・場所】

(22) この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。

- Čia yra kambarys, kuriame mes dirbame.  
 ここにある.PRS.3 部屋.M.SG.NOM どの.M.SG.LOC 私たちが.1PL.NOM 仕事する.PRS.1PL

【内の関係の連体修飾節・所有者】

(23) 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。

- Jau išmečiau tą kėdę, kurios viena koja nulūžo.  
 もう捨てた.PAST.1SG その椅子を.F.SG.ACC どの.F.SG.GEN 1つの足.F.SG.NOM 折れた.PAST.3

【外の関係の連体修飾節】

リトアニア語の主な補文節には、英語の that 節に相当する接続詞 kad に導かれる節、関係代名詞・関係副詞に導かれる節などがある。補文節は、一般的に、動詞、動詞派生名詞、形容詞中性形、あるいは副詞に従属し、主語または目的語として機能する。概して、発話、心理、知覚、感情、評価などの具体的陳述を表すことを特徴とする。なお、リトアニア語では、補文節は、しばしば、分詞あるいは副分詞に置換可能である。なお、リトアニア語の知覚動詞 (matyti 「見る、見える」、girdėti 「聞く、聞こえる」)などは、(24b) Girdžiu garsus 「(私は) 音を (対格) 聞く」のように対格を取るため、伝統的に他動詞に分類されるが、(24d) Girdėti garsai 「音が (主格) 聞こえる」のように、知覚動詞が不定形の場合、知覚される対象が主格主語となり自動詞のような格枠組みを取りうる点で、特殊な他動詞として位置づけられている。後者の場合は、意味上の主語 (経験者) を与格で表すことができる。

(24) ドアを叩いている音が聞こえる。

- a. Girdžiu, kaip [kažkas] daužo duris.  
 (私は) 聞く.PRS.1SG どのように 誰か.NOM 叩く.PRS.3 ドアを.F.PL.ACC  
 ((私は) [誰かが] ドアを叩いているのを聞く.)
- b. Girdžiu daužomų durų garsus.  
 (私は) 聞く.PRS.1SG 叩かれる.PASS.PRS.PTCP.F.PL.GEN ドアの.F.PL.GEN 音を.M.PL.ACC  
 (直訳：(私は) 叩かれるドアの音を聞く.)
- c. Girdžiu daužant duris.  
 (私は) 聞く.PRS.1SG 叩くのを.ADV.PRS.PTCP ドアを.F.PL.ACC  
 (直訳：(私は) ドアを叩いているのを聞く.)
- d. Girdėti daužomų durų garsai.  
 聞こえる.INF 叩かれる.PASS.PRS.PTCP.F.PL.GEN ドアの.F.PL.GEN 音が.M.PL.NOM  
 (直訳：叩かれるドアの音が聞こえる.)

### 【外の関係の連体修飾節】

接続詞 *kad* に導かれる節は、名詞に従属することもある。

(25) あの人結婚したという噂は本当(か)？

Ar tiesa, kad tas žmogus susituokė?  
 ~か 本当.F.SG.NOM ~こと あの人.M.SG.NOM 結婚した.PAST.3

### 【時間節】

時間節は、最も典型的には、接続詞 *kai* 「～とき」に導かれる。リトアニア語では、接続詞に導かれる時間節は、分詞や副分詞に置換可能である。述語動詞（主動詞）と同じ主語をもつ場合は分詞が用いられ、同じ主語をもたない場合は副分詞が用いられる。副分詞の意味上の主語は与格で表され、伝統的に、絶対分詞構文（あるいは絶対与格構文）と呼ばれる。伝統的には分詞・副分詞の「半述語的機能」のうちの「状況語的機能」に分類されている（「半述語的機能」には、他に、(28)で扱う「補語的機能」が区別されている）。

(26) 私はその人が来た時に夕食を食べていた。

- a. Kai tas žmogus atėjo, aš valgiau vakarienę.  
 ~時 その 人が.M.SG.NOM 来た.PAST.3 私は.1SG.NOM 食べていた.PAST.1SG 夕食を.F.SG.ACC
- b. Tam žmogui atėjus, aš valgiau vakarienę.  
 その 人が.M.SG.DAT 来た時.ADV.PRS.PTCP 私は.1SG.NOM 食べていた.PAST.1SG 夕食を.F.SG.ACC

### 【場所節】

場所節では、関係副詞として機能する疑問副詞 *kur* 「どこに」が用いられる。

(27) 私はその人が待っている所に行った。

- a. Aš nuėjau ten, kur tas žmogus laukia.  
 私は.1SG.NOM 行った.PAST.1SG そこに どこに その 人が.M.SG.NOM 待っている.PRS.3
- b. Aš nuėjau į tą vietą, kur tas žmogus laukia.  
 私は.1SG.NOM 行った.PAST.1SG その場所へ どこに その 人が.M.SG.NOM 待っている.PRS.

視覚や聴覚などの知覚を意味する知覚動詞の場合、関係副詞として機能する疑問副詞 *kaip* 「どのように」が用いられる(28a)。この種の補文節は、しばしば分詞(28b)あるいは副分詞(28c)に置換可能である。



このような分詞および副分詞の機能は, 伝統的には「半述語的機能」のうちの「補語的機能」に分類されている(「半述語的機能」には, 他に, (26)で説明した「状況語的機能」が区別されている). インフオーマントによれば, 分詞による(28b)は見た対象により重点を置き, 具体的な場面(たとえば, その人が通りを(あるいは競技会で)走っているところを見た)を表すのに適しているのに対し, 副分詞の(28c)は見た動作により重点を置き, 一般的な場面(たとえば, いつもその人が走っているのを見た)を表すのに適している.

【補文節・視覚】

(28)私はその人が走っていったのを見た.

- a. Aš mačiau, kaip tas žmogus bėga.  
 私は.1SG.NOM 見た.PAST.1SG どのように その 人が.M.SG.NOM 走っている.PRS.3
- b. Aš mačiau tą žmogų bėgantį.  
 私は.1SG.NOM 見た.PAST.1SG その 人を.M.SG.ACC 走っている.PRS.PTCP.M.SG.ACC
- c. Aš mačiau tą žmogų bėgant.  
 私は.1SG.NOM 見た.PAST.1SG その 人を.M.SG.ACC 走っている.ADV.PRS.PTCP

【補文節・聴覚】

(29)昨日の夜, 私は彼らがしゃべっているのを聞いた.

- a. Vakar naktį aš girdėjau, kaip jie kalba.  
 昨日 夜 私は.1SG.NOM 聞いた.PAST.1SG どのように 彼らが.3M.PL.NOM 話している.PRS.3
- b. Vakar naktį aš girdėjau juos kalbančius.  
 昨日 夜 私は.1SG.NOM 聞いた.PAST.1SG 彼らを.3M.PL.ACC 話している.PRS.PTCP.M.SG.ACC
- c. Vakar naktį aš girdėjau juos kalbant.  
 昨日 夜 私は.1SG.NOM 聞いた.PAST.1SG 彼らを.3M.PL.ACC 話している.ADV.PRS.PTCP

【補文節・知識】

知識を意味する補文節(30a)は, 副分詞節(30b)に置換可能であるが, 分詞節には置換されない.

(30)私はその人が昨日ここに来たことを知っている.

- a. Aš žinau, kad tas žmogus atėjo vakar.  
 私は.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG ~こと その 人が.M.SG.NOM 来た.PAST.3 昨日
- b. Aš žinau tą žmogų atėjus čia vakar.  
 私は.1SG.NOM 知っている.PRS.1SG その 人が.M.SG.ACC 来た.ADV.PRS.PTCP ここに 昨日

【補文節・直接発話／間接話法】

リトアニア語には, 直接話法と間接話法の区別がある((31a)(31c)を対照). 間接話法を表す補文節(31a)は, 分詞(主格形)に置換できる(31b). ただし, 発話者である主節の主語と同じ主語をもつ場合にのみ分詞に置換可能である他, 動詞 sakyti「言う」が再帰辞をともなった再帰動詞 sakytisである方が自然である.

(31) 間接話法：(昨日) 彼は彼が今日ここに来たと言った。

a. (Vakar) Jis sakė, kad čia atėjo vakar.  
 昨日 彼は.3M.SG.NOM 言った.PAST.3 ~こと ここに 来た.PAST.3 昨日

b. (Vakar) Jis sakė-si čia atėjęs vakar.  
 昨日 彼は.3M.SG.NOM 言った.PAST.3-REFL ここに 来た.PAST.PTCP.M.SG.NOM 昨日

直接話法：(昨日) 彼は, 「私は今日ここに来た」と言った。

c. (Vakar) Jis sakė: „Aš čia atėjau šiandien“.  
 昨日 彼は.3M.SG.NOM 言った.PAST.3 私は.1SG.NOM ここに 来た.PAST.1SG 今日

リトアニア語は日本語のような内在節を持たない。

【内在節・従主・主主】

(32) 私はリンゴが (あの) 皿の上にあったのを食べた (直訳：私は皿の上にあったリンゴを食べた)。

a. Aš suvalgiau obuolį, kuris buvo lėkštėje.  
 私は.1SG.NOM 食べた.PAST.1SG リンゴを.M.SG.ACC どの.M.SG.NOM あった.PAST.3 皿に

b. Aš suvalgiau obuolį, buvusį lėkštėje.  
 私は.1SG.NOM 食べた.PAST.1SG リンゴを.M.SG.ACC あった.PAST.PTCP.M.SG.ACC 皿に

【内在節・従主・主目】

(33) 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。

a. Aš pagavau katę, kuri įėjo į namą.  
 私は.1SG.NOM 捕まえた.PAST.1SG ネコを.F.SG.ACC どの.F.SG.NOM 入ってきた.PAST.3 家に

b. Aš pagavau katę, įėjusią į namą.  
 私は.1SG.NOM 捕まえた.PAST.1SG ネコを.F.SG.ACC 入ってきた.PAST.PTCP.F.SG.ACC 家に

執筆者連絡先: esakurai@gw2.u-netsurf.ne.jp, esakurai@tufs.ac.jp

原稿受理: 2019年5月8日